4

台北の結果と分析

蔡　春美（国立台北教育大学幼児教育学部教授）

今回台北で行ったアンケートの回答数は計2,259人で、そのうち大多数は母親による記入であった（母親81.0%、父親16.7%）。子どもの幼児教育機関入園状況については、幼稚園が多数を占め、次に託児所と未入園者であった（幼稚園児61.3%、託児所児13.7%、未就園児22.6%）。統計結果に基づき（p.168 基礎集計表）、注目すべき結果を以下にあげる。

１．幼児およびその家庭の基本状況

（１）１家庭における子どもの数は２人が多い

調査した2,259世帯の中で、子ども２人の家庭は59.4%を占め、一人っ子は28.8%であった。性別は男子50.1%、女子49.9%で、おおむねバランスがとれている（p.8 図Ａ−１・３）。

（２）核家族が多い

父方の祖父母や母方の祖父母と同居していない核家族が55.2%を占めた。祖父との同居は31.4%、祖母との同居は40.5%であったが、母方の祖父母との同居は少数であった。ここから台北の幼児をもつ家庭の半数以上が核家族であることがわかる（p.11 表Ｃ−１）。

（３）家庭収入は中の上程度が多い

家庭の年間収入についての問いに無答不明は1.1%だけであった。幼児をもつ家庭における収入格差は大きいが、比較的多いのは「91万〜100万元」と「101万〜150万元」の２つの層で、それぞれ15.6%、24.4%と計40.0%を占めている（p.184 基礎集計表）。台北において100万元前後の収入は中の上程度に属する。統計によれば、台湾における一般国民の平均年収は約87万元であるが、調査対象である幼児家庭の40.0%が100万元前後である。したがって、調査は台湾の一般家庭の経済状況を代表しているわけではない。

（４）幼児の父母の年齢は30〜40歳が多い

調査対象の父親の年齢は「31〜35歳」(26.1%)、「36〜40歳」(43.0%)、「41歳以上」(22.8%) の３つの年齢層に集中しており、合計91.9%となっている。一方、母親の年齢は「26〜30歳」(15.6%)、「31〜35歳」(39.1%)、「36〜40歳」(35.2%) の３つの年齢層に集中しており、合計89.9%となっている（p.10 図Ｂ−２〜３）。母親の年齢は一般に父親より若い。これは台湾における一般の結婚スタイルの男女の年齢比と大いに関係がある。幼児の平均

年齢５歳をもとに父母の出産年齢を推定すると、いずれも26歳から35歳の間であり、親として心身ともに成熟年齢に達していたことがわかる。

（５）幼児の父母の学歴は短期大学卒業が３割程度

父親の学歴は短期大学（27.9%）と四年制大学（28.7%）に集中している。大学院も16.4%存在し、３者合わせると73.0%を占める。一方、母親の学歴は多くが短期大学（33.9%）と四年制大学（30.3%）に集中しており、また18.8%が高等職業学校で、３者合わせて83.0%である。母親の学歴が短期大学である比率は父親を大きく上回る（p.11 表Ｂ－２～３）。台北市には大学が多く、就学機会は男女平等であり、近年若干の短期大学で女子学生が男子学生を上回る現象がみられることと、父母の学歴がいずれも依然として上がっていることに注目すべきである。また、インターネットの使用状況からみると、「週に３～４日」から「週に５日以上」インターネットを使用する保護者の比率は42.0%、インターネットを「まったく使っていない」保護者は11.5%であった（p.11 図Ｃ－１）。ここから、現在はインターネットを使用して情報を検索することができる保護者も次第に多くなっていることがうかがえ、今後インターネット運用などデジタル関連を学ぶ向きも増加するであろう。

２．幼児の生活状況

（１）幼児の生活には、遅寝の傾向がみられる

台北の幼児の起床時刻は「７時頃」(22.6%)、「７時半頃」(25.2%)、「８時頃」(24.1%）に集中し、合計71.9%となっており、それぞれは全回答の４分の１前後を占める（p.46 図１－１－１）。就寝時刻も「21時半頃」(20.0%)、「22時頃」(29.3%)、「22時半頃」(24.6%）に集中しており、合計73.9%となっている（p.48 図１－１－５）。どの年齢の子どもも「７時半頃」起床、「22時頃」就寝が最も多く、回答のおよそ３分の１を占めている。北京や上海の幼児に比べ、起床時刻は約30～40分遅く、就寝時刻も約40～50分遅い（p.51 図１－１－９）。子どもたちの夜の睡眠時間はおよそ９～10時間の間であり、昼寝の約１～２時間を加えると、１日のトータルの睡眠時間は10～12時間である（図表省略）。台北市のほとんどの家庭がテレビを所有しており、テレビは24時間、番組を放送している。またデパートは通常22時まで営業している。多くのおとなたちは就寝が遅く、子どもたちもおとなのリズムに合わせて、遅くまで起きていることが多い。気をつけないといけないのは健康への影響である。

（２）幼児の習い事（才藝班）は普通のことになっている

台北の幼児の習い事には２種類ある。１つは幼稚園や託児所で行われるもので、多くが午後や保育時間終了後である。もう１つは塾あるいは幼児託児保育センター（安親班）に行って参加するもので、保育時間終了後や休日の土曜である。

今回の調査は56.4%の幼児が習い事に参加していることを示した（p.54 表１－２－１）。女子が男子より習い事をしている比率が高く（女子58.5%＞男子54.4%、図表省略）、年齢別にみると、年齢が上がるにつれて、している比率も高くなっていることを示した（６歳児77.8%、５歳児71.5%、４歳児51.3%、３歳児25.0%）。３歳児を除き、４、５、６歳児ではいずれも半数以上が参加し、６歳児では４分の３以上に達している。習い事の種類をみ

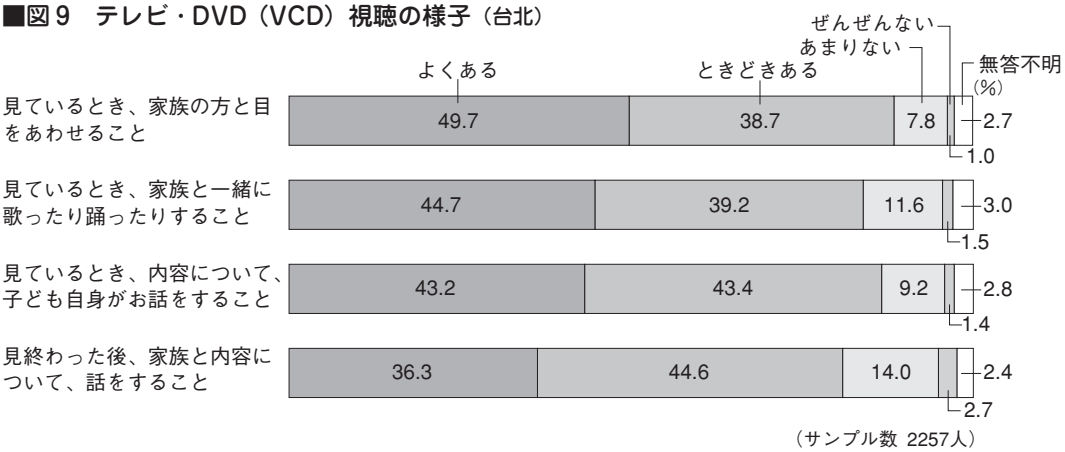
ると（p.56 図１−２−１）、「絵画教室」に通っている比率が最も高く（24.5%）、「英会話などの語学の教室」（19.4%、台北では子どもが外国語を学習するというのはイコール英語学習である）、「楽器・音楽」（17.2%）、「バレエ・リトミック」（14.2%）と「計算」（12.6%）と続いている。この調査では、母親に現在通っている幼稚園・託児所への要望をたずねている。その中で、「保育終了後、おけいこ事をやってほしい」という項目では、「とてもそう思う」が23.1%、「まあそう思う」が48.5%と、肯定的な回答が合計71.6%に達していることがわかる（p.180 基礎集計表）。習い事についての結果は、この幼稚園・託児所への要望の結果を裏づけるものとなった。ここから保護者の習い事に対する期待がみてとれる。

（３）テレビはすでに幼児の家庭生活の核になっている

今回の調査は78.4%の幼児がテレビを「ほとんど毎日」見ていることを示した。テレビの視聴状況については年齢による差はあまりみられない。ラジカセ（CD）を「ほとんど毎日」使用する幼児が33.0%であるのに対し、DVD（VCD）やパソコンの使用は少ない。多くは「ごくたまに」使用する程度であるDVD（VCD）を「ごくたまに」使用30.1%、パソコンを「ごくたまに」使用35.2%）。そしてテレビゲームを使用する幼児はさらに少ない。47.5%の家庭は、もともとテレビゲームを所有していない（p.170 基礎集計表）。これは、幼児の視力保護の角度から、パソコンなど目の負担になる機器への早すぎる接触は避けようと、教育関係者が近年保護者に絶えず呼びかけていることといくらか関係があるようだ。しかし、今回の調査で、実際のテレビ視聴時間をみると、毎日テレビを「１時間」見る子どもは32.8%、「２時間」は26.7%、「３時間」は14.7%と、合計74.2%を占めている。他の現代メディアとの接触時間があまり残っていないのかもしれない（p.171 基礎集計表）。

幼児のテレビやビデオ・DVD（VCD）視聴時の様子については（**図９**）、大部分が目や表情で家族と感情交流をしている。「見ているとき、家族の方と目をあわせること」（「よくある」49.7%、「ときどきある」38.7%、合計88.4%）、「見ているとき、家族と一緒に歌ったり踊ったりすること」の比率も高く（「よくある」44.7%、「ときどきある」39.2%、合計83.9%）、「見ているとき、内容について、子ども自身がお話をすること」の比率も高い

■図９　テレビ・DVD（VCD）視聴の様子（台北）



注）「テレビ」「DVD（VCD）」をいずれか１つでも「ほとんど毎日」「週に３〜４日」「週に１〜２日」「ごくたまに」見ている人のみ分析。

(「よくある」43.2%、「ときどきある」43.4%、合計86.6%)。また「見終わった後、家族と内容について、話をすること」の比率も低くはない(「よくある」36.3%、「ときどきある」44.6%、合計80.9%)。台湾のテレビ局は20局前後とかなりの数にのぼり、100チャンネル以上が放送されている。その中で、幼児向けアニメ番組が24時間連続して放映されているので、幼児にとってテレビ番組は生活のなかでなくてはならない存在となっている。テレビ視聴時間が長すぎると、他の活動時間に影響を及ぼしてしまうので、テレビの功罪については踏み込んだ検討が必要である。

一方、45.1%の幼児が「絵本」を「ほとんど毎日」読んでいる結果も出ている。それは喜ばしいことである。「週に3～4日」読んでいる幼児23.1%を加えれば、68.2%の幼児がつねに幼児向け絵本に接している(p.170 基礎集計表)。また、母親の就業状況別にみると、ほぼ毎日子どもと一緒に絵本を読んでいる専業主婦は53.4%を占めるのに対し、常勤で働く母親では40.7%にすぎない(図表省略)。専業主婦は比較的時間に余裕があることと関係があるのであろう。近年、台湾では多くの幼児向け絵本が出版されており、幼稚園や託児所の歌の教材やドリルの中にも絵本の形態で出版されるものがある。幼児向け絵本を制作する出版社は40～50社にのぼり、数多くの絵本がDVD、CDやカセットテープ付きで出版されているため、子どもが本を見ながらカセットテープ(CD)を聞くことが当たり前になっている。保護者も保育時間終了後に家で学習ドリルや、ワーク、英語のカセットテープ、DVDなどで学習してほしいと考えている。このため、「ワーク」を「ほとんど毎日」する子どもは24.7%、「週3～4日」の子どもが22.5%で、合計47.2%とほぼ半数の子どもたちはかなりの頻度でワークをやっている。一方、「学習用教具・知育玩具」の使用については、「ほとんど毎日」使用する子どもは19.7%にすぎず、「週3～4日」19.0%を合わせると合計38.7%であるが、その使用頻度は絵本やワークより低い(p.170 基礎集計表)。

3．母親の子育てに関する意識

(1)母親は幼児のさまざまな活動を非常に重視している

アンケートでは実際の生活のなかで幼児がよく参加する活動をあげ、これらの活動に対する保護者の重視の度合い(「とても重視している」+「まあ重視している」)をみてみた(p.75 表2－3－1)。

これらのデータから、台北の母親が「基本的生活習慣を身につけること」98.8%、「友だちと一緒に遊ぶこと」94.9%、「身体を丈夫にすること」94.5%など、人格や品行、子どもの人間関係、体の健康を非常に重視していることがわかり、大変喜ばしいことである。しかし、「数・文字・注音符号を学ぶこと」85.9%、「外国語を学ぶこと」78.9%、「芸術的な才能を伸ばすこと(音楽や絵画など)」84.3%など、知識や才能、学習を重視する母親も80%前後に達し、大多数の母親が知的教育を非常に重視していることもわかる。幼稚園・託児所への要望のなかに、幼稚園に「知的教育を増やしてほしい」について、「とてもそう思う」と答えた母親は48.7%、「まあそう思う」が43.2%で、両者合わせて91.9%に達した(p.180 基礎集計表)。知的教育の面において、母親の子どもに対する期待がどれほど切実であるか、ここからもわかる。

前述した幼児の基本的生活に関するデータからみると、テレビを毎日2時間くらい、DVD(VCD)を1時間くらい、また習い事もしなければならないとすると、幼児にとって、あまっている時間があまりなく、戸外で大自然に接触できる時間はかなり限られてしまうであろう。

（２）母親の子どもの将来に対する期待はかなりポジティブである

子どもに将来どのような人になってほしいかという質問に関しては、10項目を設けた（３つまで選択）。調査結果をみてみよう（p.73 図２－２－１）。

台北の母親の子どもの将来に対する期待はポジティブであり、かつ儒教の影響を受けて、「自分の家族を大切にする人」84.1％がトップになっている。次が「仕事で能力を発揮する人」48.9％、「社会のために尽くす人」26.7％である。意外なことに、「経済的に豊かな人」が21.5％でほぼ５人に１人と、比率としてはあまり高くないものの、それでも北京の15.1％に比べると高い。一方、「友人を大切にする人」は13.9％にすぎず、功利主義が幅を利かせる都市生活にあって、母親が人とよい人間関係づくりやそれへの配慮をいささか軽んじていることには留意すべきである。

（３）子どもへの学歴期待が高すぎる

今回の調査によれば、子どもの最終学歴に対する母親の期待は「大学卒業まで」が31.9％、「大学院卒業まで」が61.6％で、両者合わせて93.5％にのぼった。「大学院卒業まで」は、男子に望むのは63.8％、女子に望むのが59.3％であり、若干男子に対する期待のほうが高かった（p.77 図２－４－１）。子どもの学歴に対する期待が高すぎることには注意を要する。というのは、社会の人口比率と子どもの大学進学機会からみると、全員が大学を卒業するのは不可能であり、このような現実的でない期待は往々にして子どもにプレッシャーを与え、母親にも育児不安をもたらすからである。母親の子育て観に関する質問では、「世間で名の通った大学に通ってほしい」を選択した母親は34.3％、「大学進学や学校名にはこだわらない」は65.2％であり、子どもの学歴への期待と母親の子育て観との結果にいささか食い違いがある（p.71 図２－１－１⑦）。台北の母親は、一方で子どもに大学進学を期待し、一方で子どもに大変な思いをさせたくないと考えているようである。ゆえに65.2％の母親は「大学進学や学校名にはこだわらない」を選択したのだろう。だが依然として３分の１の母親が有名大学への進学を子どもに期待している。

（４）保護者からみた子どもの性格と母親の子育て観

子どもの性格について聞いた結果をみてみよう。データから、台北の保護者は、自分の子どもが明るくて前向きな性格だとみている傾向があることがわかる。「１人で遊ぶのが好き」「がまん強い」という２問を肯定する比率（「とてもそう」＋「まあそう」）だけが低い（p.181 基礎集計表）。「がまん強くない」ということはまた、挫折に堪える力が劣り、脆弱であることを指している。これは子どもの数が少ないことや、保護者の子どもへの過干渉と関係があり、今後の教育でとくに注意が必要な点である。

母親の子育て観を聞いたところ、大方がポジティブであり、積極的であることがわかる（p.70 図２－１－１①～⑦）。ただ、「子どもが３歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい」か、それとも「母親がいつも一緒でなくても、愛情をもって育てればいい」かについてだけは、「子どもが３歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい」と考えている母親は54.6％で、現代の若い母親の子育てを反映しており、以前の献身的な考え方が薄れつつあるようである。また「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」を選択した母親は60.4％である。この２つの項目は相互に裏づける結果を示している。

４．母親の仕事と子育て意識

（１）母親の負担は非常に重い

調査対象のうち「常勤（フルタイム）」で働く母親は63.0%、「専業主婦」は23.0%である（p.10 表Ｂ－１）。平均して「週５日」働く母親が82.7%で、「週６日」は11.8%である。大方は「18時台」（30.7%）や「19時台」（29.0%）前後に帰宅する（p.175 基礎集計表）。94.2%の母親が外で働くことを夫が理解（「とても理解してくれる」64.4%、「まあ理解してくれる」29.8%）してくれていると考えているが、子どもの世話をしながら仕事もする台北の母親の負担が非常に重いのは明らかである（**図10**）。

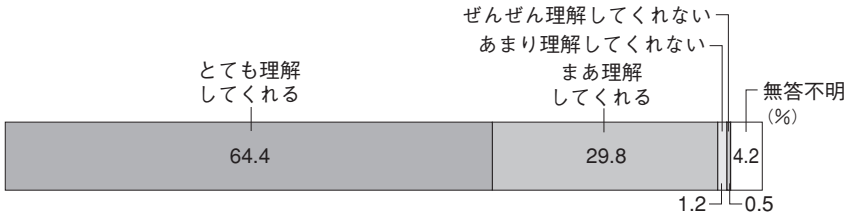
（２）子育てに対して母親はポジティブに考えている

アンケートでは、「最近、次のようなことをお感じになることがありますか」という子育て意識に関する質問（p.78 表２－５－１）、および現在の生活や子どもの成長に満足しているかどうかという質問を母親にたずねた（p.83 図２－６－１～２）。調査結果から子育てに対して、台北の母親は比較的ポジティブで、子育てに自らの責任を感じていることがみてとれる。

上記の12項目のうち、「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になること」という質問に71.7%が思うことがある（「よくある」＋「ときどきある」）と答えていることを除いて、台北の母親はその他の項目ではポジティブな考えが比較的多い。台北の母親が育児に不安を抱いていながらも、子育てに自信を持ち、ポジティブでかつ積極的に責任を担っていることがわかる。

■図 10　仕事に対する夫の理解度（台北）

●夫はあなたが仕事を持つことをどの程度理解してくれますか



注）常勤者およびパートタイムの母親の回答のみ分析。　（サンプル数 1244人）

５．父親の家事・育児への参加状況

（１）父親は家事にはあまり熱心ではない

調査は、台北の父親は通常母親よりも帰宅が遅く、「18時台」から「20時台」の間に帰宅する父親が55.9%しかいないことを示した（p.87 図３－１－１、「18時台」が13.6%、「19時台」が24.9%、「20時台」が17.4%を占めている。ただし、全体の中で「無答不明」が13.4%を占めている）。家事への参加状況については以下のとおりである（p.89 図３－２－１）。

ここから台北の父親たちは家事への参加があまり熱心でないことがわかる。毎日の仕事時間が長く帰宅時刻が妻たちより遅いことと関係があるのかもしれないし、東洋に根強い「男は外、女は内」という伝統的な考え方とも関係があるのかもしれない。そうではあっても、父親の家事参加に対する母親の満足状況をみれば、58.5%が満足している（「とても満足している」12.5%、「まあ満足している」46.0%）。しかし、もっと家事に参加してほしいと考えている母親も93.4%に達している（「とてもそう思う」47.0%、「まあそう思う」46.4%）。台北の父親たちは、もうひとがんばりして、さらに家事参加に励まなければ、妻たちに満足してもらえないようである（p.94 図３－３－１～２）。

（２）父親は育児参加には熱心である

台北の父親のかかわりをみると、育児に対しては家事よりも熱心なことが調査によってわかった。以下は父親の育児への参加状況である（p.91 図３－２－２）。

このデータからみると、「子どもを寝かしつける」ことを「ほとんどしない」という比率が少し高いのを除くと、他の育児参加項目に父親が「ほとんどしない」比率は低い。台北の父親たちは育児参加には熱心なようである。さらに調査結果から明らかになったのは、68.0%の母親が父親の育児参加に満足していることである（p.94 図３－３－３、「とても満足している」13.5%、「まあ満足している」54.5%）。そして97.0%の母親は父親がもっと育児に参加してほしいと考えている（p.94 図３－３－４、「とてもそう思う」59.5%、「まあそう思う」37.5%）。これは、台北の父親は育児にかかわるべきであることをはっきり表している。男女平等法が公布されて、社会全体で男女平等共同参画がさらに強調され、共に働き共に楽しむという意識がこれからの皆の努力の方向であることを示している。

６．社会における子育て支援状況

（１）子育て支援サービスに対する母親のニーズは多様である

子育て支援についての質問で「仕事以外で家を空けるとき、子どもの面倒を見てくれる人（機関・サービス）がいます（あります）か」とたずねた（p.98 図４－１－１）。「いる」と答えた80.2%の母親のうち、34.2%が子どもの「父親」に預けていると答え、「父方の祖父母（母方の祖父母）あるいは親戚」（台北の場合、祖父母と同居はしていないが、幼稚園・託児所から帰ってから祖父母の家あるいは親戚の家に預かってもらうことが多い）と答えたのは77.3%で、「幼稚園・託児所の一時託児」は16.1%であった（p.101 図４－１－３）。その16.1%の回答は、これら家庭の子どもは保育時間終了後も幼稚園あるいは託児所に引き続き世話してもらっていることを示している。というのは、台北の私立幼稚園や託児所はどこも延長保育を行っているから

であり、一部の保護者は仕事が終わるのが遅く、延長保育の費用を支払って18時前後に子どもを迎えに行くのである。

子どもが家を出る時刻をみると、「８時頃」(35.0%）から「８時半頃」(32.1%）に集中している（p.49 図１－１－７）。それより早い「７時半以前」はおよそ17.4%である。つまり保護者の出勤時間に合わせて、早く家を出ないといけないであろう。一方、子どもが幼稚園から帰宅する時刻は大方が16時頃から17時頃（「16時頃」11.6%＋「16時半頃」16.7%＋「17時頃」18.1%＝46.4%）に集中している（p.50 図１－１－８）。そして17時半頃以降も44.1%（「17時半頃」17.3%＋「18時頃」12.9%＋「18時半頃」9.6%＋「19時以降」4.3%）である。ここから幼稚園や託児所、子どもの父親、父方の祖父母（母方の祖父母）あるいは親戚がみな育児支援の担い手であることがわかる。

（２）母親の幼稚園・託児所への要望は切実である

幼稚園・託児所への要望について「自由な遊びを増やしてほしい」や「子育て相談ができる場所になってほしい」などの10項目をあげ、母親に回答してもらった。調査結果からわかった母親のニーズをみてみよう（p.103 図４－２－１）。

このデータからは、母親の幼稚園・託児所への要望がとても多いことがわかる。「子どもが病気の時に、預かってほしい」(28.5%、「とてもそう思う」＋「まあそう思う」）の項目のみ、およそ７割の保護者が疾病対策の観点から病気の子どもを登園させることに反対しているが、それ以外の大部分の項目でいずれも幼稚園・託児所の協力を積極的に望んでいることがわかる。現代の幼児教育機関が保護者のニーズをどれだけ満足させるべきなのかは、さらに検討を加える必要がある。台北の幼稚園·託児所は親業相談や親業教育に対し、実はなかなかよくやっている。ただ、母親が一方で「知的教育を増やしてほしい」と希望し、一方で「自由な遊びを増やしてほしい」「子どもに友だち付き合いが上手になるような働きかけをしてほしい」と願っているため､幼稚園・託児所での時間配分について、保護者と保育にあたる担当者がじっくり話し合っていく必要がある。

７．台北の幼児生活における解決を急ぐべき問題について

台北は台湾の政府が存する主要都市であり、人々の資質も一二を争い、経済、文化、教育活動のさまざまな分野がこの地で育まれ発展してきた。人々の生活レベルも高く、教育水準も高い。国際交流も盛んに行われる。しかし、それに応じて子どもの教育問題もその影響を受ける。台北のこのような環境から受けたよい影響は子どもの視野が比較的広い点である。マイナスの影響は保護者の仕事が忙しくて親子コミュニケーションのチャンスが少ない点にある。加えて社会の変化が急激なため、教育政策と保護者の意識が時代の動きに必ずしもついていっていないのである。そこで多くの問題が生まれている。ここに重要な課題を以下に挙げる。

（１）少子化、高齢化および新たな移民子女の増加問題

台北の少子化と高齢化の問題はすでに「台北における就学前教育の状況」(p.40）で述べた。

もう１つ、本アンケートの調査項目にはないが、取り上げるに値する問題がある。それは新移民の子どもが増えている問題である。近年、政府が台湾籍の男子と東南アジア地区出身の女子との婚姻を認めたことにより、新移民の子どもが増えている。2003年の統計に

よれば、新生児８人のうち１人は外国籍の配偶者から生まれた子どもである。これら新移民の子どもがますます多くなっている。その母親の文化的背景はさまざまであり、父親はまた多くが経済的弱者の層に属している。これら新移民の子どもの学習環境や社会生活への適応をいかに支援するか、教育の重要課題になっている。

（２）幼児教育機関が多様であることと幼児教育の質にばらつきがある問題

台北の６歳以下の幼児が在籍している幼児教育機関は、「台北における就学前教育の状況」（p.40 表５）にあげたように、幼稚園、託児所、短期補習塾、幼児託児保育センター（別称、安親班）などがある。それぞれ主管機関が違い、依拠する法律も異なっている。設置条件にも格差があり、利用する機関によって受けられる教育の質も違ってくることになるため、改革･改善が急がれている。

政府はこれを受け、問題解決のために幼稚園と託児所を統合する「幼託整合」（幼保一元化）に対する検討を行った。2007年７月に「幼児教育及び保育法」と幼児園設立登録規範を公布し、託児所設立登録を一時廃止する予定で、幼稚園と託児所の「幼児園」への統合を開始する。「幼児園」は２歳以上６歳未満の幼児を受け入れ、教育部門が主管する。２歳未満の幼児の受け入れ機関は「乳児託児センター」として社会行政機関が主管することになる。「幼託整合」の事業は広い範囲にわたり、多くの関連措置が必要になる。2009年までの達成を目指しているが、いまだに草案の段階であり、変わりうることが多いかもしれない。

（３）母親の子育てに過度の不安と、意識と行動の不一致がみられる

今回の調査は、台北の幼児をもつ母親の子育てには過度な不安がみられることをはっきり示した。母親は子どもにたくさんの習い事をさせたいと望んでいる。とりわけ台北では小学校１年生の教育課程に英語が加わってから（台湾の他の県や市では、多くが小学校３年生になってから英語の授業がある）、保護者は先を争って子どもに英語を学習させ、「すべて英語」（一日中英語を用いて教育し、No Chinese を標榜する）の幼稚園に入園させようとさえする。英語だけを教え、幼児教育の本質をおろそかにするような、この種の変形した幼児教育機関が子どもに与えるマイナス影響には、注意が必要である。このほか、子育てにおいて、保護者は何を重要と考えるかという認識について、一方では人格や教養を重要だと考え、大自然への接触や戸外活動は子どもにとって成長の助けになると思っている。だが、一方では、子どもの大学、大学院への進学を望んでいるため、幼児教育機関に知的教育活動を多く行ってほしいと希望している。「学業成績は子どもの成功への道を開く鍵である」とみているのである。このような非常に矛盾した現象に対して、さらに研究する余地があり、改善の方向を探らなければならない。

（４）幼児の学習へのプレッシャーを軽減させなければならない

台北の幼児たちは遅寝であり、テレビ視聴は彼らの共通の好みである。保育時間終了後には習い事や英語を学ぶ。保護者は彼らにたくさんの期待を抱いている。多くは夫婦共働きの家庭であり、すなわち父母がいずれも外で働き、朝早く家を出て、夜遅く帰宅するので、親子で共に過ごす時間は限られている。外国籍のお手伝いを雇って子どもの世話をさせ、送り迎えをさせる家庭もある。メディアや科学技術の発達に伴って、台湾の幼児は科学技術や学業を非常に重視するようになっている。アジア幼児チャンネル（Cartoon Network）の2005年の調査によれば、10世帯中９世帯はパソコンを所有し、70%の人が家

でインターネットを利用している。台湾の幼児は電子機器の愛好者であり、学ばなければならない事柄が山のようにある。進学至上主義が社会全体に充満していて子どもが受けているプレッシャーの重さも想像に難くない。それをいかに軽減するか、教育関係者、保護者および教育政策にかかわる人たちの深慮が待たれる。

【参考文献】
楊国賜ほか 2002『全国幼児教育普査計画成果報告』国立嘉義大学。
蔡春美ほか 2000『幼児教育機構行政管理』心理出版社。